

[012]史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2344396>

出版情報 : 史淵. 12, 1936-03-10. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University
バージョン :
権利関係 :

彙報

九大史學會例會

昭和十年六月三十日

本年度前期例會は六月三十日の日曜日(午後二時より九大第二學生集會所)で行ふ。

當日は數日來の豪雨で水害至る所に頻出、雨に閉ぢ込められた會場は晝間から燈をつけて、左の講演があつた。

一、連歌師の傳記に就いて

九大助教授 小島 吉雄氏

一、漢代文化の東漸と日韓の形勢

九大教授 重松 俊章氏

(梗概別記)

講演の後同所にて晚餐會にうつる。食後次の研究發表談話が交換され午後八時閉會。

一、福岡縣史料編纂について

縣囑託 伊東尾四郎氏

近刊の福岡縣史料第三輯の紹介あり猶今後の企劃について陳述せられ最近和蘭の日本研究者ラーデル博士の來訪等を語られる。

一、江戸時代に於ける人形村の戸口精密調査の一例

福高教授 安田喜代門氏

人形操師で有名な氏の故郷徳島藩津那郡鮎原西村の江戸時代戸口精査記録を紹介せられた(日本文學第五卷第五號及六號同氏論文參照)

一、ハンガリーの風習について

醫學博士 戸上駒之助氏

ハンガリーの風俗習慣に大いに東洋的のものがある事を漫談せられた。

講演梗概

漢代文化の東漸と日韓の形勢

重松 俊章氏

漢代文化の半島東漸は既に支那戰國時代から痕跡が認めらるゝ。それは箕氏朝鮮王國の成立である。漢初燕の亡命衛滿が之に取つて代つた頃、箕氏は既にその開祖殷の箕子より四十餘代を経過してゐたなど稱すれどこれは元より信ずることは出来ぬが、少くとも之が戰國中葉以後、支那内地の戰禍と苛賦とを避けて遼東から朝鮮半島に安住の地を求めた山東河北の漢族植民

團であつたことは疑のない處であらう。之が事實上、史上に見えた第一回の漢族の半島移民團といつてよいであらう。第二回は秦末漢初の動亂時に於ける漢族の大舉移民が即ちこれで、衛氏の古朝鮮は之を代表せるものである。第三回の大舉移民は漢武帝の半島征服當時に行はれたもので、史記平準書に「彭吳賈が朝鮮を滅し滄海郡を置かば、燕齊の間、靡然として渡動す」などあるのが、その例證である。此の頃衛氏當時の第二次移民團は第三次移民團の新興勢力に推されて南方に移り、第一次の箕氏移民團を更に南韓地方に壓迫した。かくて第一、二、三次の漢族移民の南方遷移に伴ふて半島の啓發開化は漸次に北方から南方に發展して行つたもので、前漢末から後漢の初にかけて大舉半島に第四次の漢族が移住せる頃には漢族文化は完全に半島全土に普及し、引いては我が國九州にまでそれが波及した。朝鮮史上で、新羅の六部が元、北鮮から移住した謂ゆる浪樂遺民（平壤地方の舊漢族移民）の「阿殘・東人」から成立したなど傳ふるのは半島南部の韓族と樂浪地方から南遷せる漢族との同化融合した事實を傳ふるものに外ならぬ。加之、早くから半島南部に據つてゐた倭人にも之が影響して九州方面にその勢力の後退を餘儀なくせしめた様である。

朝鮮史、殊に新羅史上で當時屢々倭人の侵入を記せ

るは、之が反動として我が民族の祖先が大陸に於ける足場の毒遣であると考へてよい。それは兎に角として半島に於ける漢文化の南進が遂に我が九州に波及して銅鐵等の優秀なる武器の使用が始まり、之を利用して神武天皇を中心とせる大和部族の東征ともなつたものでこれは大体、前漢末期の動亂時に第四回の大舉移民團が半島北部に移到した西紀直前の頃であつたらうと思はれる。（重松教授手記）

連歌師の傳記について

小島 吉 雄氏

連歌師といふ専門職業の發生は明確な所は分らないけれども、大鉢鎌倉時代の中頃には既に存在したものと考へてよろしい。最初が生計の道を連歌に求めたものでなく、ただ心の慰みとして連歌を樂んだ所謂數寄者が社會の需要するままに連歌で活計をたてるやうになつたのである。連歌師は殆ど皆法林であるが、これは平安朝末から盛んにあらはれた風流歌僧の系統をひいてゐるものであつて、法師と呼ばれてゐるところから見ると、あまり身分の高かつたものとは思はれない。ところが舊今連談集といふ書物に善阿法師が鷲の尾の花の下でたはむれに時の上皇の御簾をかかけ奉つたといふ話が出てゐるやうに、下賤な連歌法師も文學

を通じて高貴にも立交ることが出来たのであつて、此の連歌師が堂上貴族と接觸し得たところから、連歌師の地位といふものが向上する機縁を得たのである。連歌史上、連歌師のバトロンとなつた公家で特筆すべきものが三人ある。二條良基、一條兼良、三條西實隆が即ち是れであるが、此の三人の所へはその當時の連歌宗匠が夫々蠟集し、そして此の入達を中心として連歌の興隆を企圖してゐるのである。ところで茲に興味あることは、これらの公家と連歌師との關係には時代的差違があつて、それがまたその時代文化相の一面を示してゐることである。良基は連歌師に對してはあらゆる方面で指導的地位に立つてゐる。兼良は學問的に連歌師を指導してゐるが、連歌そのものについては良基ほどの指導的權威をもつてゐない。實隆になると、全く連歌師に引ずられてゐるのであつて、學問的にも實作的にも連歌師の後塵を拜してゐるのである。そこに各時代の様相があらはれてゐて面白い。

さて連歌師の型を見るに、俗人型と隱遁者型との二つの型がある。連歌師には在家法師が多いから俗臭紛々たるものが多い。寧ろ此の俗臭ある方が連歌師本来の面目と考へた方が當つてゐるやうである。しかし、連歌師には眞に出世間的的心境に住し隱遁者生活に入り切つたものもあつたのであつて、眞下滿廣とか、十住

心院心敬とかは即ちそれである。此の隱遁者型と俗人型とによつてその思想にも幾分相違があつて、その連歌論の上にも差違が生じてゐる。俗人型といふものは、また武士的といふ言葉で言ひかへられるので、武士から轉向した連歌師に此の武士的俗人型が甚だ多い。連歌師の傳記には分らぬことが多い。しかし最近では高山宗砌の密傳抄とか古今連談集とかいふやうな新資料も發見せられて段々明かになつて來てゐる。連歌師と九州との關係も少しは分つてゐる。その一二を茲に述べてみる。(中略)連歌師は地方武士からの點料で生活してゐたので時々その得意まはりをするため始終旅行をしてゐる。此の旅行によつて公家文化を地方へ傳播し、また武家的新興思潮を公家に傳へて兩文化の仲媒者となり、中世文化の特殊相に大いに貢獻するところのあつたことは衆知のことである。

(小島助教授手記)

昭和十年十月六日

後期例會は秋晴れの十月六日午後二時より九大第二學生集會所で開かれた。先づ講演會は重松教授の挨拶に始り

一、三説の新解釋 九大講師 日野開三郎氏
一、元寇防壘の新發見 九大教授 長 沼賢海氏
長沼教授は蔭れた史料である、福岡縣築上郡角田村

末久文書によつて元寇の博多灣防備の疑問を解かれた。精緻な論考は一片の梗概のよくする所でないから日野講師の新説と共に御發表の機を俟つ。

講演の後晚餐會席上での研究發表は左の通り

一、エチオピアに就いて

九大教授 長 壽 吉氏

伊國との間に問題化したエチオピア帝國の歴史から今回の事件を粗上に登された。

一、享保年間の舊福岡藩の財政について

文學士 伊 奈 健 次氏

享保十五年度の福岡藩支出入會計統計についての研究を説明され、質疑應答あり。

一、聖福寺所藏天文年中借家帳

文學士 青 木 義 憲氏

福岡市内の禪刹聖福寺に藏する天文十二年の年號ある借家帳を紹介せられ當時の博多の社會相の一面を示された。(鏡山)

國史學會例會

第三十四回例會(十月八日)

一、町人の勃興に關する一考察 小 江 慶 雄

近江商人を中心として座の地理的分布、變遷を説き座商人と諸大寺との關係より小幡商人山越商人

等に及び次いで戰國武將との關係、城下町の經營に論及せらる。

第三十五回例會(十二月九日)

一、攝津に於ける清和源氏の發展と多田庄の成立に就て 宮 下 勝 次

先づ人的關係を中心として多田源氏の發展を吟味し次に物的關係を中心として多田庄の地名、位置交通、及び多田庄附近の經濟的意義を述べ最後に人的物的二要素の結合としての多田庄に就きて研究を發表。

第三十六回例會(十二月十七日)

一、室町初期に於ける博多商人の地位 有 光 保 茂

博多商人と九州探題との關係、幕府との關係を明らかにされ次に博多商人宗金の地位を九州探題との關係、老松堂日本行録の著者宋希環との關係、幕府との關係を説明され、後に萩野文庫本老松堂日本行録を展覧。以上何れも大多數の學生出席の下に長沼先生の御批評有り。(檜垣)

讀書會

國史學會規定により原則として毎週二時間講義以外に學生相互の研究を行つてゐる。鏡山助手檜垣副手の

指導により活氣ある研究が續行されてゐる。只後學期に臨時講義續出のため欠課のあつた事を遺憾とする。

後學期テキスト 貞永式目の論議

・出席者 鏡山助手、檜垣副手、宮下、有光、原田、阿部、本田、井上の各君（有光）

國史講讀會

參會者の公的私的の所用で斷續的にしか開くを得なかつた事は遺憾である。來る新學期より、本會の生みの親である竹岡教授の御歸朝もある事だし、新しく力強く踏み出す事を望んでゐる。每會御出席下さつた金田助教に深謝しなければならぬ。

出席者 金田助教、鏡山助手、檜垣副手、伊藤、

波多、本多、青木諸學士。

一、六月二十一日（木）午後一時より考古學研究室にて開催。

戸 令

金田助教

一、十月十日（木）

全

一、十月十七日（木）

全

一、十一月二十七日全

全

田 令

檜垣副手

（青木）

修學旅行

國史專攻生の修學旅行の意味で十一月二十三、四日の兩日の休日を利用して、熊本縣菊池、玉名兩郡へ一泊旅行を行つた。午前七時三十一分博多發、同十時高瀬驛下車、玉名中學中川先生等に迎へられて直ちに同町在住の鹿子木家を訪問する。同家の先祖は隈本城主として戰國時代の雄族であつて系圖や大友、龍造寺、鍋島關係の文書等二時間に亘り拜見ノートして同家を辭去した。一行は秋晴れの田舎道を自動車二臺に分乘して高瀬町の郊外伊倉に至り唐人墓を見學、更に切支丹墓碑、室町時代以降の板碑の數多ある墓地で一同長沼教授指揮の下に拓本とりに大童となる。又車を馳せて玉名郡石貫村廣福寺に着く。紫陽山廣福寺は後村上天皇正平六年菊池武時の建立開山は大智禪師である。その藏する文書三百餘通の多數にのぼり歴世菊池家關係のものが大部を占めてゐる。切つめた時間では到底讀きれず他日再訪の機に割愛せねばならなかつた。廣福寺文書は壽福寺文書等と共に玉名中學で寫眞版の卷物が出来て居り中川先生等の御好意により時間の許す限り携帶被見の便が與へられた。寺を辭して再び車上の人となり山鹿に向ふ。途に玉名郡江田村の有名な船山古墳を見學、山鹿温泉に至り洗心閣に一泊。

明けて二十四日午前八時山鹿發隈府町に至る。前日

九大支那學研究会

六月廿六日(水)午後六時

第二學生集會所五號室に於いて、學生の研究發表會開催。

本城 説治

五行思想に就いて
詩經の陳風に於ける巫歌に就いて

久米 安行

重松教授、楠木教授、目加田助教授、及專攻學生出席。午後十時閉會。

拾月一日(火)正午

新任日野開三郎講師の歡迎會を、第二學生集會所五號室にて開催。

楠木教授、目加田助教授、山内講師、國史研究室より鏡山助手、楡垣副手、西洋史研究室より讀井副手、及支那學專攻學生出席。

拾一月十三日(火)正午

第二學生集會所にて例會開催。

「明治時代の漢學」に就いて山内講師の講演あり。
重松教授、目加田助教授、日野講師、專攻學生八名出席。

拾二月七日(土)

午後三時半支那留學生の中、文科に在籍する人々を

惠まれ過ぎた快晴の天候漸く險しく雨さへ落ちて來た。隈府では先づ菊池神社に參詣、社務所で菊池關係文書殊に武重自筆の家憲や武光の筆跡等を感じ打たれ乍ら閱覽各自ノートし寶物館に菊池氏關係遺物を看覽する。同社地は菊池本城の趾で、社務所の椽から紅葉した楓を遙して展望される十八外城の連綿する丘陵に包まれた菊池氏の舊根據地に華々かなりし古へを思ひ浮べた。社の背後の山の一角に征西將軍宮懷良親王の御在所があつた。城の堀切り等落葉を踏んで觀て廻る。續日本紀に見ゆる鞠智城も附近に擬定されてゐるとか、神社の寶物館にある奈良時代とおぼしい古瓦に心ひかれた。城趾を下つて文明九年菊池重朝建立の孔子堂趾に至る田圃の間に記念の一碑を残すのみ。次で武光建立の正觀寺に詣づる。明治に入つて廢寺となつたが菊池十五代武光十六代武政、二十二代能雲等の墓碑が細雨に煙つて又とない風情。雨に禍され十八外城見學を斷念して午後四時隈府町で解散、各自思ひ思ひのコースで歸途につく。熊本附近の史蹟に足を伸す者もあり、一行中鏡山助手有光君は再び高瀬に引返し彌富村岩崎に最近發見された切支丹墓碑の拓本をとる。形は普通の墓石に異ならないが正徳二年の年號ある一基は側面にTMとあり額面に十字を陰刻し、貞享四年の一墓は上端にやはり十字を刻してゐた。(有光)

歓迎し、親睦を計る爲に、その歓迎會を工學部本館中央食堂に於いて開催。

先づ重松教授の挨拶に次いで、各自の自己紹介あり目加田助教の在支當時の懷舊談あり、續いて晚餐、食後餘興等ありて六時半閉會。出席者は

重松教授、楠本教授、目加田助教、日野講師、濱口氏（學生課）

留學生諸氏は。蔡南冠、朱法雨、俞念遠、劉書傳、宋雲芳の五氏、及支那學專攻學生、庄野、久須本、本城、久米、阿倍、近藤、尾形。

昭和拾一年貳月四日（火）午後六時

本年度卒業生庄野、久須本兩君の送別會を明治製菓三階にて開催、記念撮影の後、九時閉會。

重松教授、楠本教授、目加田助教、日野講師外七名出席。

西洋史學研究會

第十八回例會（昭和十年六月廿五日）

「カロリングル王領地のプレカリウムに就いて。

Ernst Robert Curtius
柳 春 生

Französische Kultur. Eine Einführung. 1930
の紹介
讚井 副手

彙 報

第十九回例會

大類仲講師歓迎研究會

第二十回例會（昭和十年十二月十九日）

Der Grundraker der Jüdischen Geschichte
(F. Heman, Geschichte des Jüdischen Volkes.)
の紹介
服 部 哲 郎

Der Rhythmus im Wandel von Reaktion und
Revolution. (1815-1852)

(Historische Vierteljahrsschrift. XXX Jahrg.
Juli. 1935)

田 中 友 次 郎

第二十一回例會

G. Weill. La France sous la monarchie constitutionnelle. Chap. V. Les lettres, les arts, et les Sciences. の紹介。
服 部 哲 郎

卒業論文紹介

カールヌ王朝時代を中心とするフランク國王
の領地貸與に就いて。

柳 春 生

第二十二回例會（昭和十一年二月二十七日）

一九三

卒業論文紹介

メッテルニヒ、システムの理論的基礎とその

歴史的地位

金 炳 模

Joachim Moras, Ursprung und Entwicklung

des Begriffs der Zivilisation in Frankreich

(1756—1830). 1930. R. A. Lochove, History

of the Idea of Civilisation in France (1830—

1870). 1935. 〇紹介。

齋井 副手
(讀井)

昭和一〇年度

史學專攻生卒業論文題目

國 史 學

徳川封建社會と町人階級

後三條天皇の御讓位につきて

藤原朝に於ける天王寺參詣の一考察

九州に於ける石清水八幡別宮の研究

幕末維新時代に於ける排佛の研究

東 洋 史 學

唐沙門法琳の研究

西 洋 史 學

メッテルニツヒ「體制」の理論的基礎とその歴史

的地位

金 炳 模

庄野 眞澄

小江 慶雄

河野 房男

波多野 皖三

宮崎 百太郎

湯川 直文

カロルス王朝時代を中心とするフランク國王の
領地貸與に就いて

柳 春 生

昭和十年

第二學期

史學關係講義題目

國 史 學

對外關係より觀た國家觀念の發達(〇・五) 長沼 教授

日本紀講讀(〇・五) 長沼 教授

古文書講讀(〇・五) 長沼 教授

明治維新史(一) 長沼 教授

日本思想史(一) 長沼 教授

日本思想史(一) 長沼 教授

東 洋 史 學

兩漢時代史(概説)(一) 重松 教授

支那宗教一揆の研究(特講)(一) 重松 教授

唐代史(〇・五) 日野 講師

宋史食貨志(〇・五) 日野 講師

西洋史學

西洋史演習(A)(〇・五) 長 教 授

西洋史演習(B)(〇・五) 長 教 授

最近政治外交史(〇・五) 大村助教

西洋史(〇・五) 武藤 講師

其 の 他

日本政治史(一)

今中 教授

日本法制史(演習)(一)

歐洲外交史(一)

西洋倫理學史(〇・五)

西洋美術史要(〇・五)

西洋美術史(一)

教育史概説(一)

古事記演習(一)

明治短歌史(一)

清代古文の評論(一)

佛蘭西文藝思潮の變遷(〇・五)

フランス喜劇史(〇・五)

獨文學史(〇・五)

金田助教授

西山 教授

大島 教授

矢崎 教授

兒島 講師

松濤 教授

笹月 講師

小島助教授

山内 講師

須川助教授

進藤 講師

佐藤助教授

三九ノ十、三九ノ一一、三九ノ一二、四〇ノ一

竹 柏 會

筑紫史談 六一、六二、六三、六五、六六

筑 紫 史 談 會

最近の經濟史學會 昭和十年七月、八月

九月史十月、十一月、十二月、十一年一月

西洋史研究 七、八

史學研究 七ノ一

東洋文化 一三三、一三四、一三五、一三七、一三八

皇 學 三ノ二、三ノ三、三ノ四

史 苑 九ノ三、九ノ四

青丘學叢 一九、二〇

第六十六議會報告書

史 觀 第八册

龍谷史壇 一六

東方學報

史學 十四ノ二、一四ノ三

士佐史談 五二、五三

源 源 四

神宮皇學館々友會

立教大學史學會

青 丘 學 會

立憲民政黨本部

早稻田大學文學部

龍谷大學史學研究室

東方文化東京研究所

慶應大學内三田史學會

士 佐 史 談 會

大谷大學國史學研究會

受贈圖書雜誌(自昭和十一年七月至昭和十一年一月)

地學雜誌 五五六、五五七、五五八、五五九、五六〇、五六一、五六二

現代佛教 一二四

考古學雜誌 二五ノ六、二五ノ七、二五ノ八、二五ノ九、二五ノ一〇、二五ノ一一、二五ノ一二、

心 の 花 三九ノ七、三九ノ八、三九ノ九、

東京地學協會

現代文 教 社

考古學 會

東京地學協會

現代文 教 社

考古學 會

史 林 二〇ノ三、二〇ノ四、二一ノ一

京都帝大内史學研究室

史林總目索引

全

國史學 廿四、廿五

國學院大學内國史學會

史 潮 五ノ三

東京文理大學大塚史學會

國立北平大學報法學專刊

一ノ二、三、四、五

國立北平大學法學院

大分高商研究資料彙報

十ノ四

大分高商商事調查部

國立北平圖書館彙報

八ノ三、五、六

國立北平圖書館

鄉土史壇 一ノ六、一ノ七、一ノ八、一ノ九、

一ノ一〇、一ノ一一

一信社出版部

史學會報 八

京城帝大史學會

立教大學史學同好會報

五ノ二

斯會

同志社文學 一八

同志社文學會

北海道帝國大學一覽

昭和十年

上代文化 一三

國學院大學上代文化研究會

拓植文化 一五ノ三、四

拓植大學拓植研究會

名古屋溫古會報告 一九

斯會

社會政策家としてのビスマルク.....	島村保	三	(四九)
中世に於ける社寺金融の特別低利率について.....	伊奈健次	三	(六五)
北宋の便糴に就いて.....	森住利直	三	(八八)
元寇と神風.....	長沼賢海	四	(一)
最近帝國主義勃興の經濟的原因に就いて.....	大村作次郎	四	(五)
水戸學と佛教.....	河野福夫	四	(六)
彌生式土器論と北九州(一・二).....	山本博	四	(六)
ケレタロの罪の由來に就いて.....	長壽吉	五	(一)
章學誠の方志學.....	井邊一家	五	(七)
ビスマルクと奥匈國內の獨逸族.....	小林榮三郎	五	(五)
建武前後の神佛の信仰關係.....	長沼賢海	六	(一)
シレジャ地領繼承の關係.....	長壽吉	六	(六)
元寇役恩賞地の配分に就いて.....	鏡山猛	六	(三八)
侯國政治訓諭の一考察.....	文學博士 長壽吉	七	(一)
セラエテ事件に對するセルビヤ政府の責任(一・二).....	文學博士 大村作次郎	七	(五)
近世復古主義の源流に就ての一考察.....	竹岡勝也	七	(八)
元寇と松浦黨.....	長沼賢海	七	(二)
アウランジエ運動.....	益田健次	七	(三)
新井白石の古代觀と神道觀.....	竹岡勝也	八	(三)
廬山文化の黎明.....	井上以智爲	八	(五)
再保險條約不更新とホルシユタインの心境.....	小林榮三郎	八	(九)
海防論者としての魏默深.....	井邊一家	八	(二五)

廬山文化と慧遠……………	井上以智爲	九	(一)
生子信教に關するケルン評論……………	長 壽	九	(二)
法華念佛兩宗の展開と唯一宗源神……………	長 沼賢海	九	(三)
三河一向一揆の研究……………	青木義靈	九	(四)
松浦黨の發展及び其の黨的生活(上・中)……………	長 沼賢海	十	(五)
オルシニ事變の前後(一)……………	長 壽	十	(六)
南宋四川の對羅に就いて……………	森住利直	十	(七)
十九世紀獨乙史學史の一齣「所謂「プロシヤ派」に關する一考察」……………	讀井鐵男	十	(八)
安南史上の一政權としての土變……………	山内晋郷	十一	(九)
新尙古主義と二州問題の原論……………	長 壽	十一	(一〇)
一九一二年の「ハルテン派遣」を主とする英獨海軍關係(一)……………	大村作次郎	十一	(一一)
本邦佛寺の高利貸徵利認容の根據について……………	伊奈健次	十一	(一二)
一八七八年基督教社會黨の地位……………	長 壽	十二	(一三)
一九一二年の「ハルテン派遣」を主とする英獨海軍關係(二)……………	大村作次郎	十二	(一四)
海外交通史上の壹岐……………	長 沼賢海	十二	(一五)
唐宋時代の末尼教と魔教問題……………	重松俊章	十二	(一六)
マツチーニと青年イタリヤ……………	讀井鉄男	十二	(一七)
「先秦に於ける王道論の展開」……………	西本壯吉	十二	(一八)
彙 報			
一(八四)	二(九三)	三(一〇〇)	四(一一三)
五(一八)	六(一五四)	七(二五九)	八(三五五)
九(一五二)	十(二七四)	十一(三二二)	十二(三六七)
郷土資料目錄(筑前部)……………			(一〇七)

彙
報